

編集後記

▼特集・登校の子をもつ親の言い分」の中の「わたしは自分の子どもが不登校をしてよかったとは思えない：けれども、このことを通してたくさんのことを学び人間としておおいに成長させてもらった」「相変わらず悩んだり、困ったりしながら家族していると感じるこの頃、毎日振り回されて大変だけれど親になったと思えるこの頃です。家族バンザイ！」のことはをかみしめました。子育ては奥が深い。親が人として育つことを確認しあえる親の会「アーベルの会」のことをもっと知りたいと思いました。

▼「学校について思う」を寄稿してくださいました臨床心理士今井氏の「不登校の子は弱いのではないかもしれません。感受性が鋭くてわれわれが考えている以上にいろいろのことを思い感じているのです。：聞き出すという態度でなくて：その部分をサポートする姿勢が大切」という指摘や「手を結ぶ親たち」を書いていただいたアーベルの会の代表熊谷氏の「教師はみなカウンセリング・マインドをもって：」

の提起を各学校の職員会議で正面から論じられるといいなーと思います。

▼五十嵐氏の「今日の教科書攻撃」を読みました。少年時代を中国で育った私は父から聞いた抗日ゲリラの処刑に立ち会った話をまたかみしめました。中学生の頃、父からの話をきいたとき、加害者としての日本軍国主義の行為は学校できちんと教えられなかったなーとおもいました。藤岡信勝氏のゆがんだ「一國平和主義」批判は侵略の事実の前に破綻しています。

▼新潟県憲法会議主催の「憲法夜学」で上記の話をすることになり、新潟日報にそのことが紹介されました。友人の奥さんが参加し、保育園でしりあったお母さん達にもこの教科書問題への関心が高いと教えてくれたそうです。氏は「子どもたちに残酷なことを聞かせたくないというお母さんも、本当のことはさけないで：というお母さんもみんなできると話し合うことが教科書を国民のものにするはじまりだ」といっています。（本田）

▼本田敏彦氏の「二十一世紀の高校教育改革を考えるキーワードのひとつ「総合学科」」「総合学科」研究会の記録を主としてい

ます。総合学科については、本誌四八号に概要が載っていますので、改めて参照くだされば幸いです。参加者の学校状況報告は、一般の読者にはわかりにくいかもしれませんが、いづれにして「総合学科」や「総合高校」は、今後の高校教育では比重を増やします。折にふれて検討していきます。（吉田）

にいがたの教育情報 No. 50

1997年6月15日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX (025) 228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さあびす

本誌内容の無断転載を禁じます。